



山口県におけるイネカメムシの越冬生態について

山口大学大学院創成科学研究科農学系専攻 すみた あゆむ たけまつ ようこ 住田 歩夢・竹松 葉子

はじめに

イネカメムシ *Lagynotomus elongatus* (Dallas, 1851) は、本州、四国、九州に分布し、体長 13 mm 前後、黄褐色の楕円状で背部両側に黄白色の帯があるカメムシで、成虫で越冬、7~8月にイネが出穂した水田に移動する(図-1)。本種は開花期に籾の基部を吸汁して不稔籾を、穂揃期以降に加害すると籾の基部が変色した斑点米を生じる。1950年代までは斑点米被害を引き起こす主要な害虫であった(大内, 1953; 小林, 1960)。その後、発生量が少なくなっていたが、2000年以降、茨城県、三重県、滋賀県、京都府、山口県で発生が増加傾向にあり(樋口, 2019)、改めてその生態解明が重要となっている。しかし、イネカメムシの越冬生態については知見が少なく、大内(1953)は、南向きの傾斜地か冬期温暖な平地でイネ科植物が繁茂しており、土壤水分が過湿でも過乾でない落ち葉の下で、小林(1960)は、林の中や丘陵地のイネ科植物の株元で、小川ら(1960)は、発生地付近の畦畔ではなく、標高 200 m 以上の南面の山腹で冬期温暖な場所のススキやカモノハシの株元で越冬することを報告している。しかし、近年のイネカメムシ発生地周辺で、越冬成虫が大量に確認された事例はなく、鳥飼ら



図-1 イネカメムシ成虫

Overwintering Ecology of *Lagynotomus elongatus* in Yamaguchi Prefecture. By Ayumu SUMITA and Yoko TAKEMATSU
(キーワード: イネカメムシ, 越冬, コノテガシワ)

(2021) が、水田畦畔や河川敷の枯れたイネ科植物株元で数頭を、雑木林の中にある枯れたイネ科植物の株元で雌雄合わせて 17 頭を発見したが、越冬集団か否かは不明であるとしているのみである。山口県においても、本田ら(2021)が、2020年7~9月のイネカメムシの発生状況を報告しているが、冬季の報告はない。

筆者らは、研究テーマとしている果樹カメムシ類の卵寄生蜂の生態調査の一環として、それらの夏期の活動場所の1つであるコノテガシワ(マツ目、ヒノキ科)の樹幹部に堆積した落葉を冬期に回収し、寄生蜂を探索していたところ、偶然にもイネカメムシの越冬している個体の集団を発見した。そこで得られた幾つかのイネカメムシの越冬生態の知見について報告する。

1 コノテガシワにおける落葉堆積物調査

1 農林総合技術センター農業技術部落葉果樹試験地

2020年12月18日に、山口市大内の山口県農林総合技術センター農業技術部落葉果樹試験地内に植栽されているコノテガシワ5本について(図-2)、樹幹の根元にビニールシートを敷き詰め(図-3)、堆積物がこぼれないように根元を紐で固定し、樹幹部にたまっている落葉堆積物(図-4)を手で落として回収し、それらの中からカメムシ類を種ごとに個体を計数した。

調査した5本すべてのコノテガシワ樹幹部の堆積物から、イネカメムシが14~34頭/樹採集され、平均して23.8頭/樹であった。その他のカメムシを見ると、ホソハリカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシもすべての調査木から採集され、それぞれ平均10.4頭/樹、5.6頭/樹であった。チャバネアオカメムシは1樹のみで採集された(表-1)。

2 農林総合技術センター林業技術部林業指導センター

上記落葉果樹試験地内のコノテガシワからイネカメムシの越冬個体が採集されたことから、同様に本種が栽植されている山口市宮野上の山口県農林総合技術センター林業技術部林業指導センター内のコノテガシワ4本で、2021年2月5日、2月22日、3月10日に、同様の方法